紀　　要

第 17 号

2004.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

彦根市屋中寺廃寺出土の縄文時代中期・後期の土器について

小　島　孝　修

1．はじめに（図1・2）

屋中寺廃寺は滋賀県彦根市下岡部町に所在し、愛知川右岸の沖積平野に立地する（図1、滋賀県教育委員会1996）。北東には独立山塊・荒神山がそびえ、その東側には宇曽川が流れる。周辺地域に縄文時代遺跡はあまりないが、濃密に縄文時代遺跡が分布する能登川町域の正楽寺遺跡は、南に約5kmの距離に位置する（小島1999・瀬口1999）。屋中寺廃寺は、遺跡名が示す通り古代寺院跡として古くから著名な遺跡であり、大正期から昭和期にかけて実施された耕地整理の際には、瓦が大量に出土している。

この地において、平成6（1998）年度に土地改良総合整備開発事業に伴う発掘調査が、滋賀県教育委員会を調査主体、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として、前年に引き続き実施された。35のトレンチのうち、T24～T26において、幅約10.5～11.0mの連続する河道状の遺構（T2401・T2501・T2601）が検出された。このうちの黒褐色粘質土を基本とする埋土から、多くの縄文時代遺物が出土している（図2）。遺物の出土はT2401を中心とするが、トレンチ幅が1～1.5mと狭い上、湧水が激しかったため、工事による影響を考慮して掘削は地表面から深さ約1.07mまでにとどめられた（北村・中村1997）。

縄文時代の遺物はコンテナにして約10箱が出土しており、その内訳は縄文土器・土製品（土製円盤）・石器（磨製石斧・打欠石錘・石皿・サヌカイト剥片）である。縄文土器の主な時期は、縄文時代早期末から前期初頭にかけてと縄文時代中期末から後期にかけてであるが、出土状況からは、これらが層位的に分離していたとは考えにくい。

平成7（1999）年度・同8（2000）年度にはこれら縄文時代のものを含む遺物全般を対象に、整理調査が実施された。しかし、時間的な都合により、縄文時代遺物のうち調査報告書に実測図が掲載されたのは、早期・前期の土器と土製品・石器のみであり、中期・後期の土器については写真図版の掲載のみとなった。

筆者は、縄文時代中期・後期の縄文土器の残存状態が非常に良好であることから、近江地方の縄文時代を考える上で非常に有用であると考えた。これら縄文時代中期・後期の縄文土器の図化作業は実施されていたが、修正する必要のある実測図や、そのほかに図化が必要であると判断したものが少なからずあった。したがって、それらについても改めて図化作業を実施し、今回掲載することとした。

本稿では、これらの整理により図化した縄文土器について報告し、あわせて若干の検討を試みたい。

2．対象資料の概要

今回整理調査の対象とした縄文土器は、報告書写真図版19～23掲載の105点102個体のうち、早期後葉の粕畑式土器体部である1点（図版21下）を除いた104点101個体と、そのほか公表する必要があると筆者が判断した34個体の、合計135個体である。写真図版との対応関係は以下のとおりである。

図版19（上：1～3・5・7・9・10・12・27・55・74、下：34・57・67・84・128）、図版20（上：6・81・82・85・87・89・91、下：22・23・43～47・49・51・56・58b・61・71・78）、図版21（上：11・14・15・17・19・21・24・28・29・98～100、下：80・101・103・105・106・108～112・117・120・130・131）、図版22（上：13・18・36・37・39・40・52～54・59・63・134、下：16・20・31・38・41・42・62・64～66・72・75・77・95）、図版23（上：4・25・26・30・32・60・68・69・79・132・135、下：38・58a）、報告書未掲載（8・33・35・38・50・70・73・76・83・86・88・90・92～94・96・97・102・104・107・113～116・118・119・121～127・129・133）

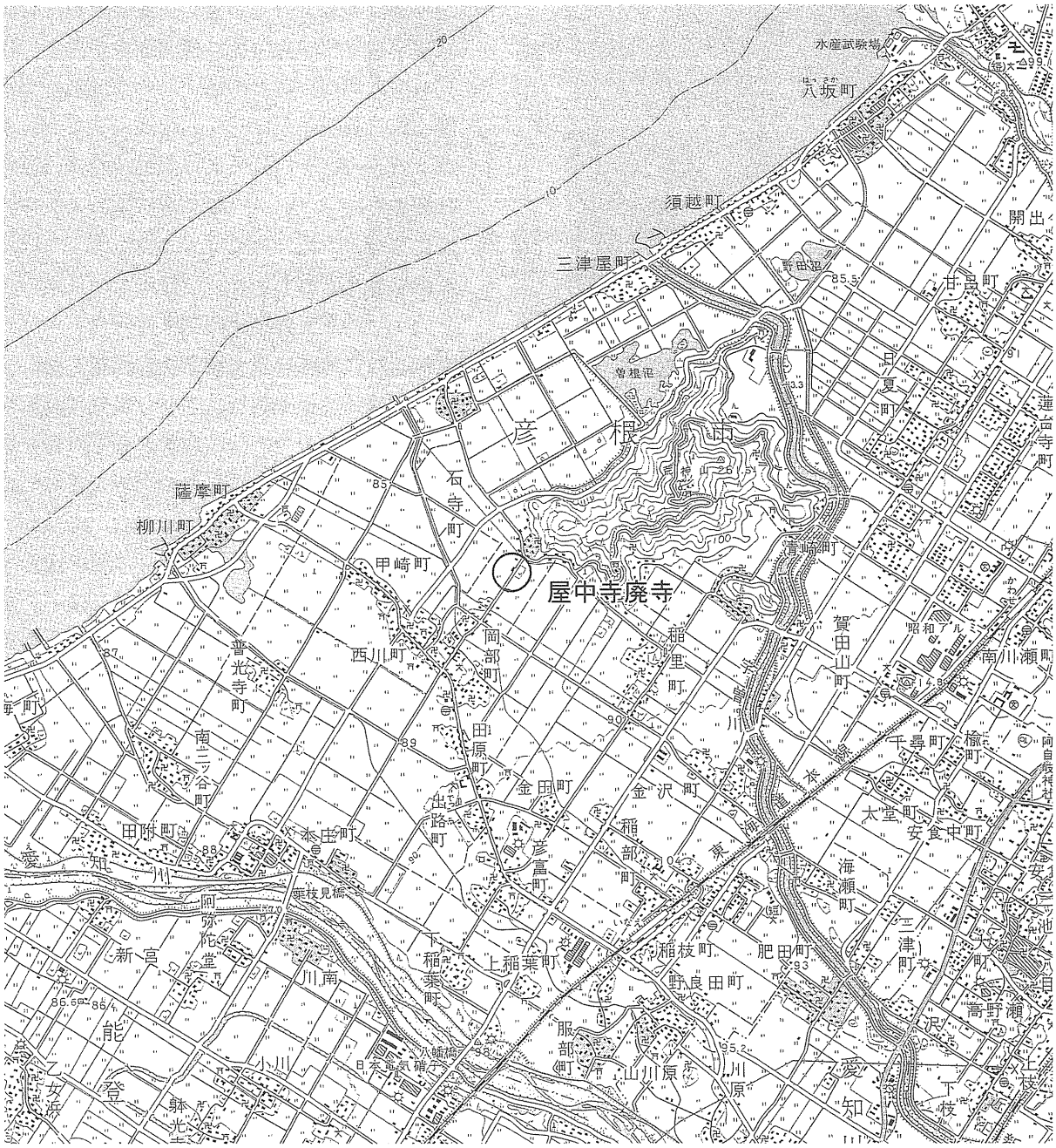

図１　屋中寺廃寺位置図（Ｓ＝１：50,000）

３．出土縄文土器の内容（図３～６）

⑴　縄文時代中期中葉（１～８）

１～３は船元Ⅱ式である。縦位の縄文地に隆帯を貼付し、隆帯上に刻みや刺突を施す。１は平口縁部であり、口縁の端部や内面肥厚部にも縄文を施す。外面には低い隆帯を蛇行して貼付し、隆帯上にヘラ状工具により縦位の刻みを施す。２は隆帯を横位に貼付する体部であり、隆帯上にヘラ状工具により斜位の刻みを施す。３は体部であり、外面には断面三角形の隆帯を鋸歯状に貼付し、隆帯上および外面に竹管状工具により円形刺突を施す。４～６は船元Ⅲ式の体部である。４・５は縄文地に素隆帯を貼付し、半裁竹管状工具による平行沈線文を隆帯に沿って施す。６は縄文地に半裁竹管状工具による平行沈線文を施す。７は船元Ⅱ式あるいはⅢ式と思われる。縦位の縄文を施す口縁部である。８は縦位の撚糸文を施す体部であり、里木Ⅱ式と思われる。

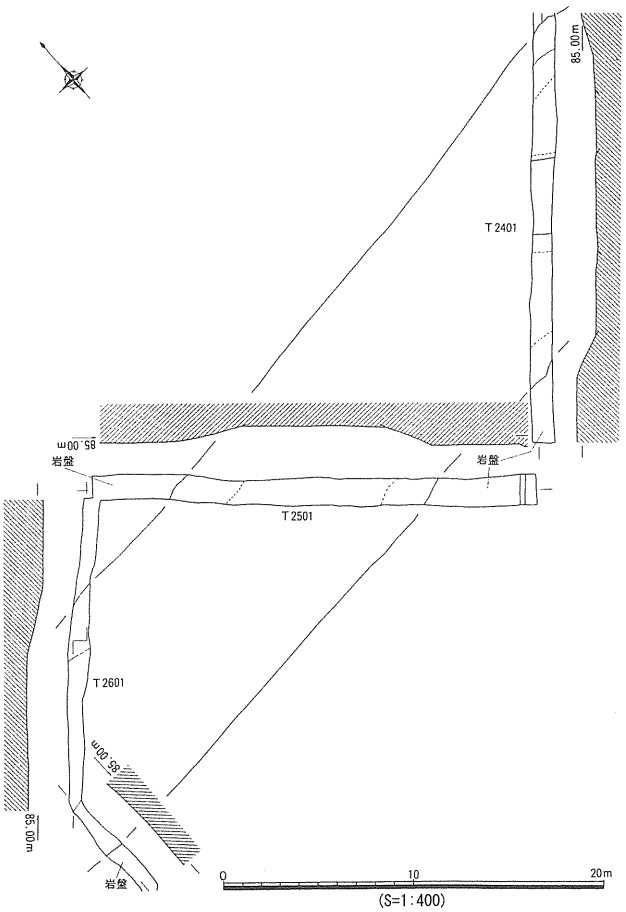

図２　河道状遺構Ｔ2401・Ｔ2501・Ｔ2601遺構図

(2)　縄文時代中期後葉（９～127）

９～60は有文土器の口縁部もしくは口縁部文様帯が判明する破片であり、59・60を除いて基本的には深鉢と思われる。９～13は文様施文に隆帯を用いるなどしてやや立体的であることから、比較的古い段階のものと思われる。一方、14～60は器面の凹凸が少なく、比較的新しい段階のものと思われる。

９・10は東海系の神明式土器の把手あり、搬入品の可能性がある。９は沈線と刻みにより文様を施す。９ａは縦位の橋状把手である。９ｂの部位は不明だが、すかし穴を施す。10は押引沈線により口縁部や体部に文様を描く。11～13は細隆帯（11）や隆帯（12・13）を用いて渦巻文を描く。11・12は平口縁部である。13は波状口縁部であり、二重の沈線により描かれた区画内には、連続するハの字文を描く。

14～29は主文様となる渦巻文（同心円文）かあるいはそれに類する文様を描くもので、渦巻文の中心には指頭押圧による円形刺突を施すものが目立つ。14～20は渦巻文部分が波状口縁となる。14が口縁端部および口縁内面に縄文を施すほか、15・16は口縁端部に縄文を施す。そのほか、14は渦巻文内に刺突を充填し、20は渦巻文を簡略化する。21～27は平口縁であり、21～23は口縁端部に縄文を施す。25は口縁に平行する沈線を凹状に窪ませ、口縁との間に縄文を施す。26は押引沈線を施すものであり、口縁端部には浅い凹線を施す。28・29は口縁端部を持たないが、その文様から口縁部に施す渦巻文と判断した。

30～51は沈線や刺突により、横位に展開する文様を描くものであり、いずれも平口縁である。30・31は口縁に平行に２条の沈線を巡らし、外面に縄文を施すものであり、30の口縁端部には縄文を施す。32は口縁に平行に３条の沈線を施し、口縁部と体部の境の屈曲部には隆帯を貼付する。33は口縁が内彎する器形を呈し、推定口径は30.5cmを測る。口縁部には、口縁に平行して巡る２条の沈線間に、３条の蛇行沈線を横位に巡らす。体部には、下に開放する［状の沈線文が認められる。34は口縁にほぼ平行する１条の沈線と連弧状に巡る沈線の間に、横位の刺突を列状に充填する。口縁外面と口縁端部に縄文を施し、体部には区画内に縄文を施す。35は外面全面および口縁端部に縄文を施し、３条以上の蛇行する凹線気味の沈線を口縁に平行に施す。

36～41は口縁部文様帯にハの字あるいは斜位に沈線を施すものであり、この文様が口縁部を巡るのかあるいは区画内に充填されるのかは不明である。基本的に外面には縄文を施し、38には口縁端部にも縄文を施す。40・41は口縁部と体部の境に隆帯を貼付し、40の体部には５条の沈線を縦位に施す。

42は平口縁部であり、３条の沈線を連弧状に施すと推測される。

43～50は指頭押圧による円形刺突を連続して施すものである。43は円形刺突のほかに沈線を施すもので、口縁端部に縄文を施す。44～47は１・２条の刺突列を口縁外面に巡らせるものであり、45・46は地文に縄文を施す。48～49は口縁端部が残存しておらず、48に縦位の縄文帯を施すことを考えると、体部と考えたほうがいいかもしれない。51は口縁に平行

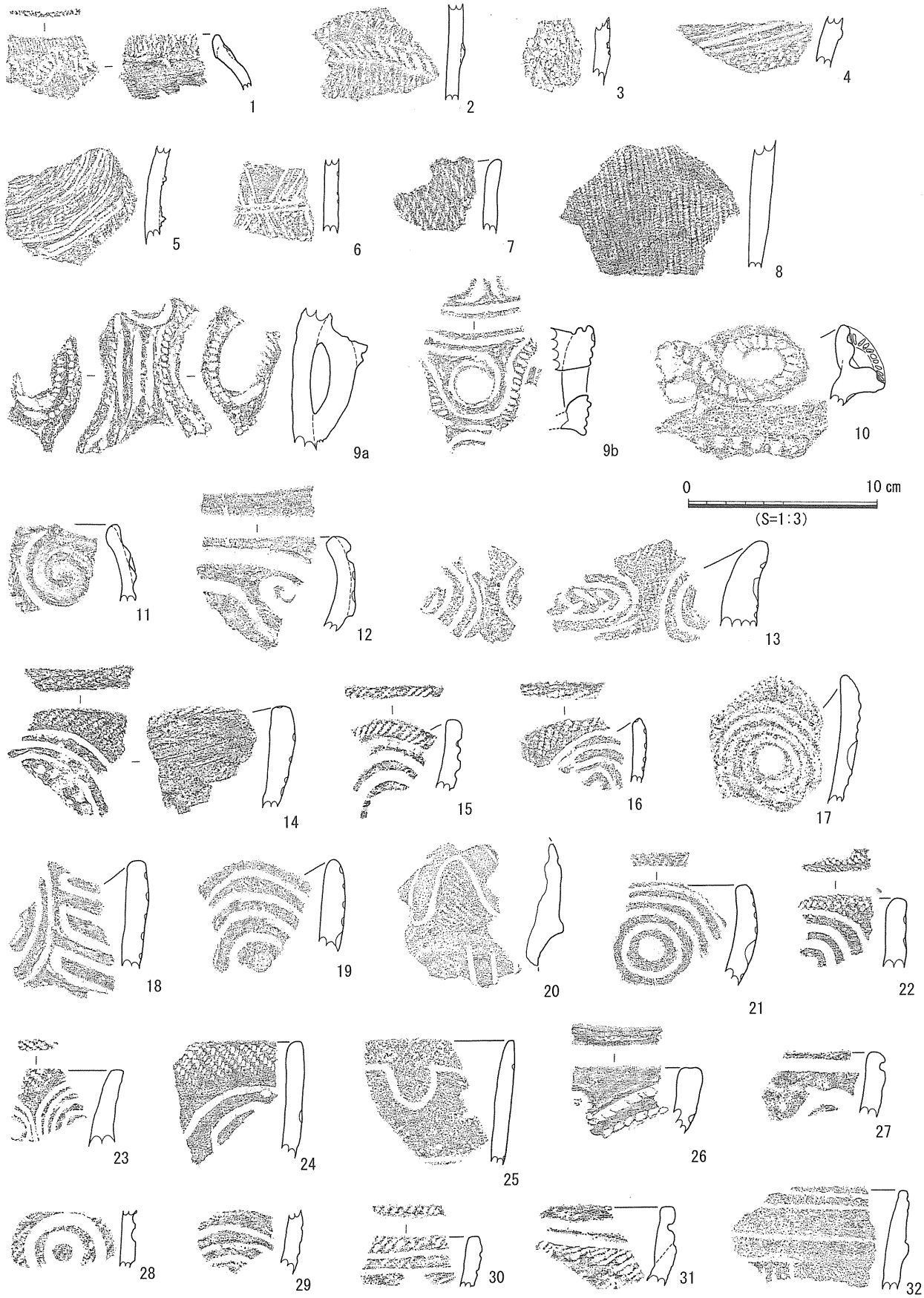

図３　屋中寺廃寺出土縄文土器(1)

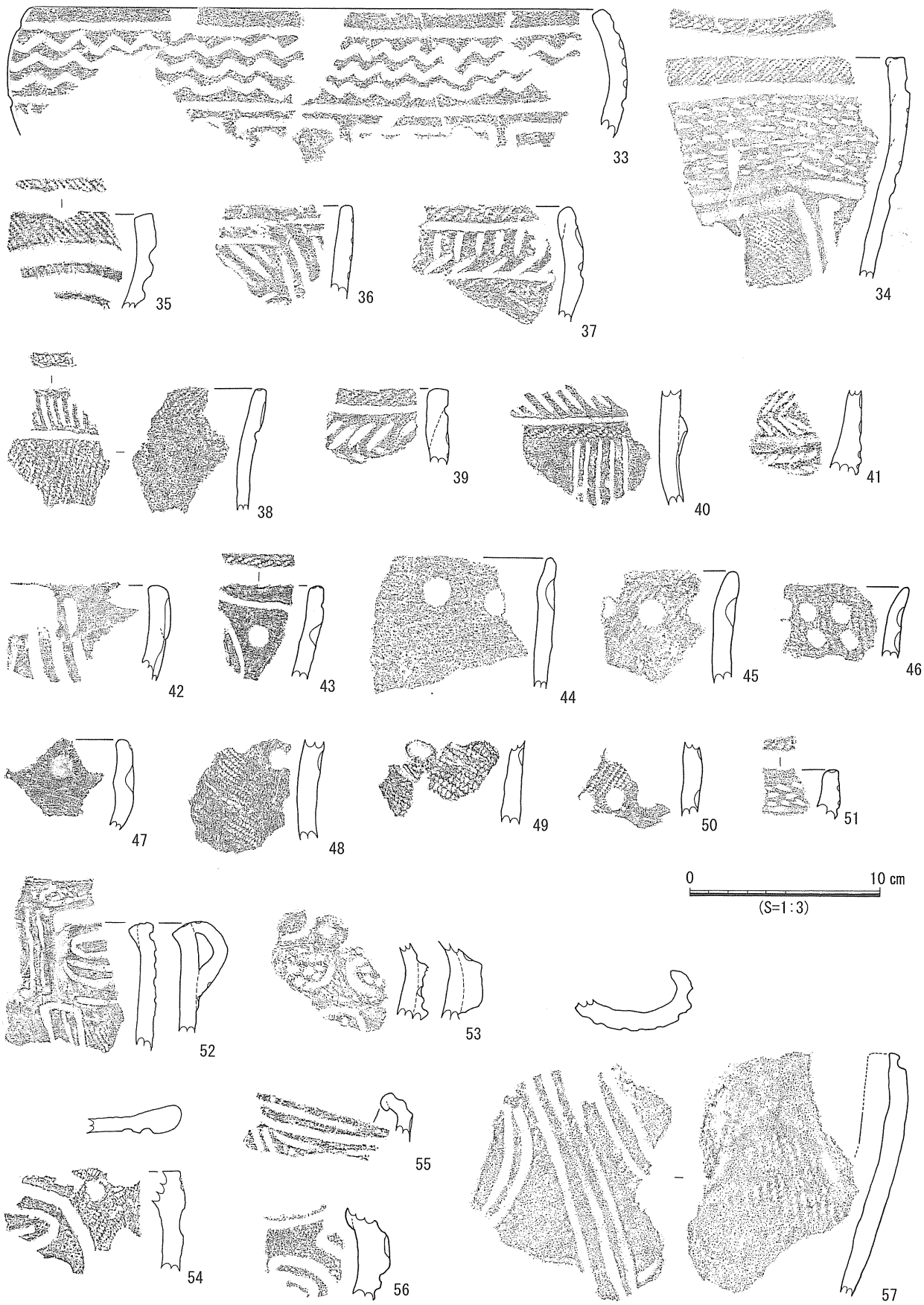

図４　屋中寺廃寺出土縄文土器(2)

する２条の沈線間に竹管状工具による横位の刺突を充填するもので、口縁端部に縄文を施す。

52・53は縦位の橋状把手を施すものである。52は内面に肥厚した口縁端部に、楕円形区画を描き、その中に刺突を施す。外面には橋状把手上に沈線を縦位に施し、その両側には楕円沈線文を上下に２つ配する。体部には沈線と縄文を縦位に施す。53は橋状把手が退化して突起状の隆帯となったものであり、その左右には沈線と隆帯で区画された楕円形区画文内に刺突を充填する。その上下にも文様があるが不明瞭である。

54～58は大型の山形口縁を持つものである。54は外面に沈線により文様を描き、側面には縄文を施して指頭押圧による円形刺突を施す。口縁端部は面取りを施す。55・56は口縁端部および外面に沈線により文様を描くものであり、口縁端部は内面に折り込んで肥厚させる。57は山形口縁の側面を内側に折り込むものであり、山形口縁部外面に３条の斜位の沈線を施し、側面には２・３条の沈線を施す。内面には一部に縄文施文が認められる。58は山形口縁が筒状を呈するものである。地文に縄文を施したのち、沈線により、山形口縁外面に渦巻文を描き、その下位には左右に半月状の文様を描く。側面には沈線により楕円文を描く。頂部の内外面には円形の指頭押圧による刺突をそれぞれ２つ施す。

59・60は浅鉢と思われる。59は大きな屈曲部を持つもので、外面全面に縄文を施す。59ａには屈曲部上に半円形の把手を貼付して沈線文を施し、その下位左右の屈曲部下には円形刺突を施す。60は口縁の端部と内面に沈線を横位に施し、沈線内には等間隔に刺突を施す。外面は無文である。

61～100は有文土器の体部である。61～67は口縁部と体部の境に、隆帯を横位に貼付する屈曲部であり、その上位・下位に１条の沈線を巡らせることが多い。61は隆帯上に刺突を施し、隆帯の上位・下位に沈線を巡らす。62は隆帯の上位に巡らせた２条の沈線間に刺突を充填する。63は隆帯の上位に竹管状工具による斜め上方向からの刺突を巡らし、体部には縄文を施す。64は隆帯上にヘラ状工具による刻みを斜位に施す。65は隆帯上に縄文を施し、隆帯の上位に巡らせた１条の沈線の上位には、複数条の沈線を斜位に施す。体部には７条以上の沈線を縦位に施す。66は隆帯下位に沈線による文様が認められる。67の隆帯は低く、その上位には刺突を施す。体部には上端が蕨手状を呈する沈線を縦位に施し、その左右には区画文内に綾杉文を描く。

68～79は沈線や隆帯により曲線文を描くものなどを集めた。68は連弧状の沈線文が確認できる。70は地文に縄文を施し、２条の沈線を横位に施す。71は３条の沈線を横位に施し、その下位にはハの字文を横位に施す。72・73・77・79は屈曲する２条の沈線と縄文を施す。74は屈曲する隆帯により文様を描く。75は３条の沈線を横位に施し、その上下に沈線により曲線を描く。76は６条の連弧状の沈線を描き、一部に縄文を施す。78は下向きの三角形状に貼付された隆帯で、器面と接する一部の側面には刻みを施す。

81～96は隆帯・沈線・縄文帯などにより、縦位に展開する文様を描く体部である。81・82・89は２条の沈線間に細沈線により綾杉文を描くものである。81は文様単位の間に２条の隆帯を縦位に貼付する。82は２条の直沈線と２条の曲沈線を縦位に交互に描き、その間に綾杉文を描く。84～88・90・91は縄文と複数条の沈線を縦位に施すものである。縄文を地文として施すもの（84・85・90）と、縄文帯として縦位に施すもの（86～88・91）がある。84は推定体部最大径が23cmを測る。沈線による区画内に縄文を充填し、区画の中央に沈線を蛇行して施すが、区画の幅は一定していない。87と88は４条の沈線文を縦位に施すもので、胎土や施文技法などから同一個体である可能性が非常に高い。90は傾きから底部付近の部位と思われる。91は３条の直沈線と１条の蛇行沈線が確認できる。92・93は縄文帯のみを縦位に施す。83・94～96は沈線のみを縦位に施すものであり、このうち83は傾きから底部に近い部位と思われる。

97～100は体部中央に紡錘文（97）や渦巻文（98～100）を施すもので、比較的新しい段階と考えられる。98は渦巻文中心に指頭押圧による円形刺突を施す。

101～116は縄文のみを施すものである。101～112は口縁部であり、101～107は波状口縁、108～112は平口縁である。また、これら口縁部のうち、101～109はいずれも口縁端部に縄文を施す。107は口縁内

図５　屋中寺廃寺出土縄文土器(3)

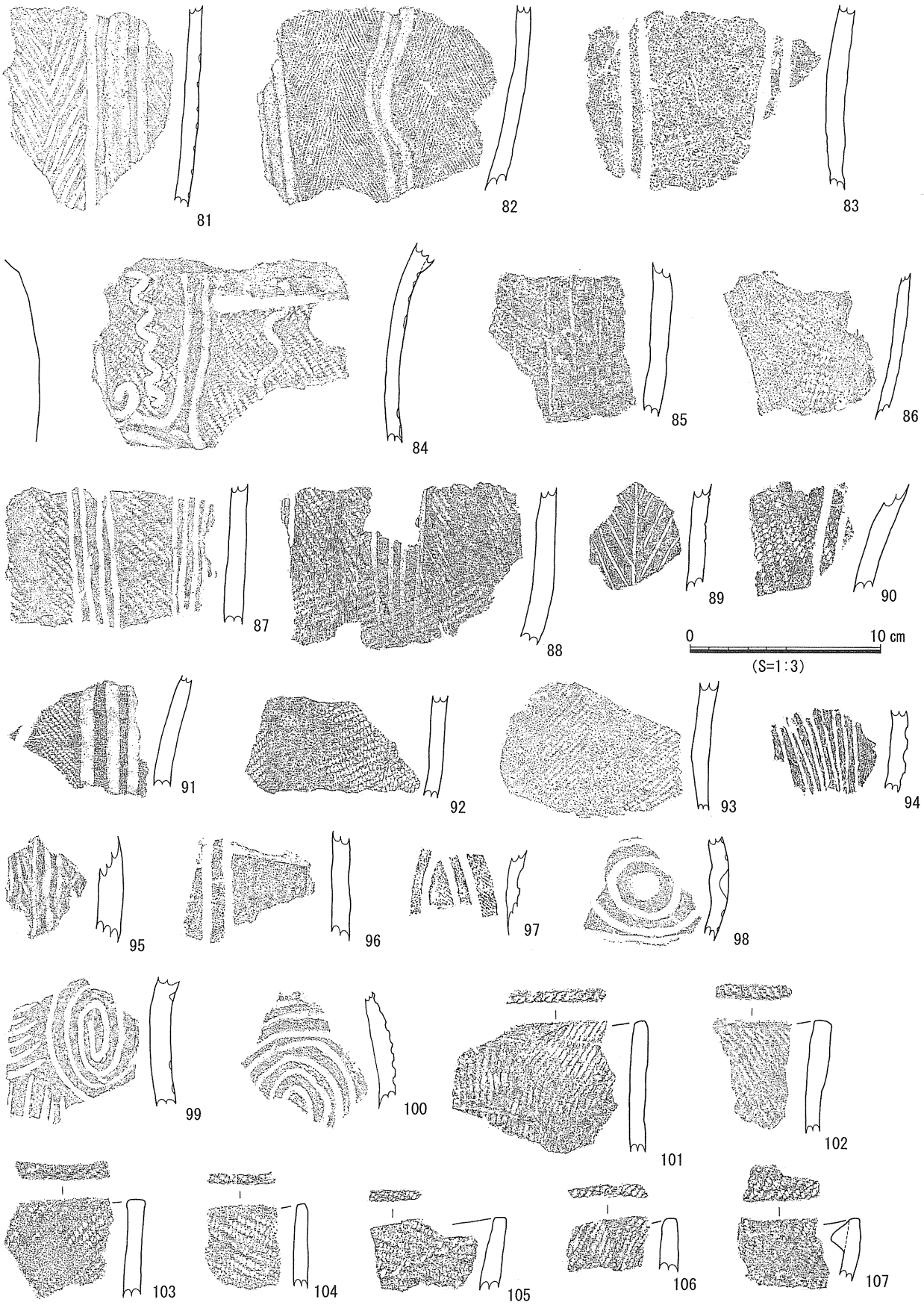

図6　屋中寺廃寺出土縄文土器(4)

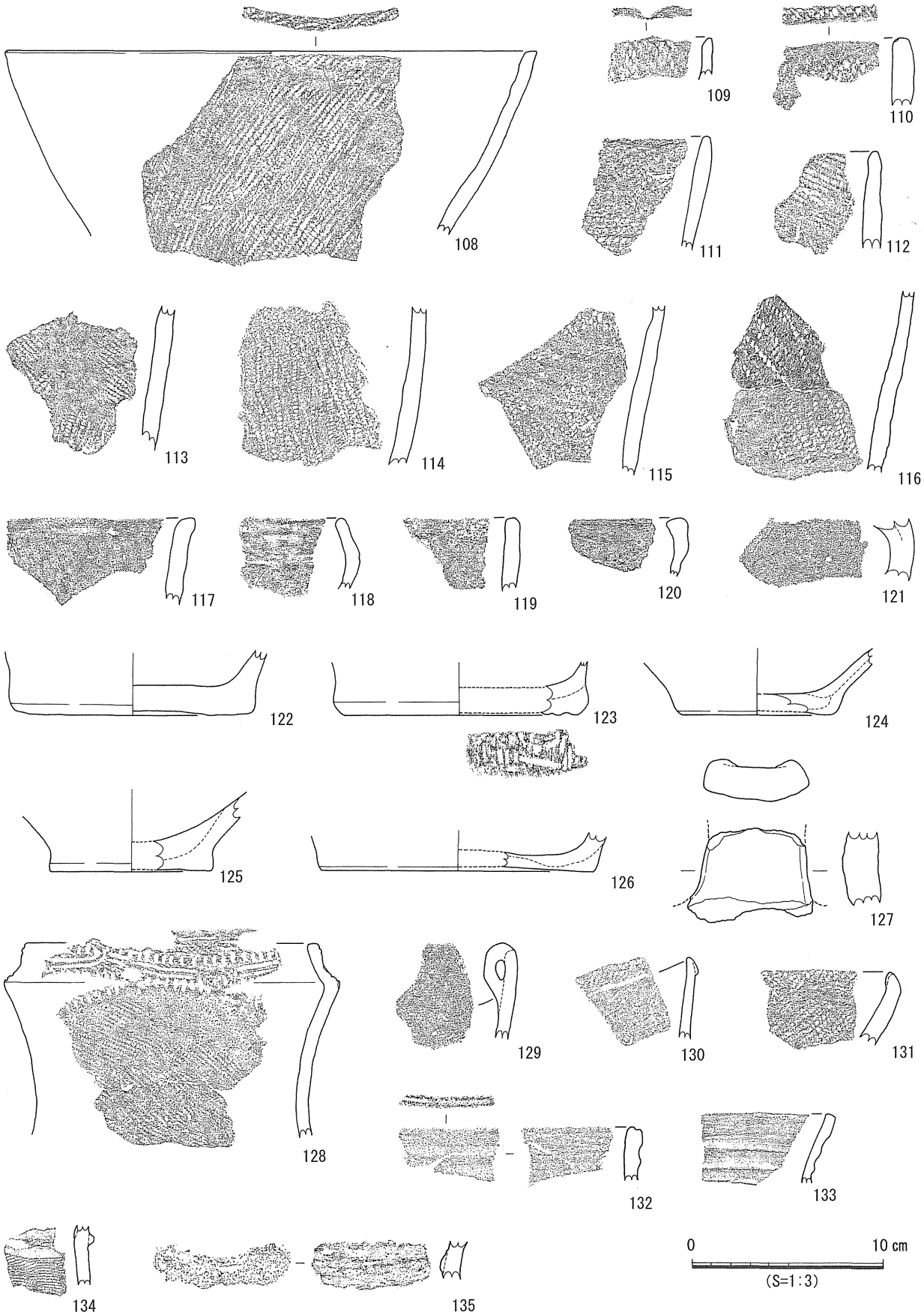

図７　屋中寺廃寺出土縄文土器(5)

面に肥厚部を持つ。108は、推定口径は28.0cmを測り、口縁が大きく外反する器形を呈する。109は口縁端部が片口状に窪む。113～116は体部である。

117～121は無文土器であり、いずれも口縁部である。117～119は口縁端部を丸く収めるが、このうち118は屈曲部から浅鉢である可能性を持つ。121は把手の基部である可能性を持つ。

122～126は底部であり、いずれも底面はやや上げ底である。122・123・126は斜め上方に体部が立ち上がるが、124・125は立ち上がりがやや緩やかである。また123には底面に網代圧痕が認められる。127は台付深鉢の脚部である。

(3) 縄文時代後期・時期不明（128～135）

128は、推定口径は15.5cmを測る。大きな屈曲ののち、内湾して立ち上がる器形を呈する。口縁から屈曲部まで、半裁竹管状工具による2条の沈線と爪形刺突を、交互に2条づつ横位に施す。体部には撚りの細かい縄文を施す。施文技法から判断すれば、縄文時代前期の所産とするのがよいのかもしれない。

129は橋状把手を口縁内面に縦位に貼付する平口縁部であり、外面は無文である。130～131は外面に縄文を施す波状口縁部であり、縄文時代後期前葉の所産と思われる。130は口縁外面に粘土紐の貼付により肥厚部を作り出し、131は幅広の端部は内面に折り込まれる。132・133は平口縁部であり、外面に口縁に沿って2・3条の凹線を施すものであり、縄文時代後期後葉の宮滝式である。132は口縁端部にも浅い1条の凹線を施す。134は隆帯を横位に貼付するものであり、隆帯の上位・下位を沈線でなぞる。135は外面が無文の体部であり、内面に隆帯を横位に貼付する。134～136は施された縄文や調整などの特徴から、縄文時代後期の所産と思われる。

4．まとめ

屋中寺廃寺の立地や、今回報告した縄文時代中期後葉の縄文土器について、若干の検討を行いたい。

立地について　前述のように、屋中寺廃寺の周辺地域において、縄文時代の遺跡はほとんど確認されていない。しかしこの点に関しては、調査頻度の問題も加味するべきである。さらに、縄文時代中期後葉の資料で、ある程度の数量が出ている周辺の遺跡となると、南西7～9kmに位置する大中の湖・小中の湖周辺の近江八幡市白王遺跡や蒲生郡安土町竜ヶ崎A遺跡、あるいは南南西約12kmに位置する安土町上出A遺跡が挙げられることを付け加えておきたい。

良好な残存状況からは、これらを使用した人々の居住地は、近接する微高地などに立地していた可能性が高いと推測される。また、遺物が出土した自然河道は、その検出面積がごく一部であるため、多くの遺物が未検出のままであると考えられる。

このほか、遺跡の内容とは関係ないが、新たに縄文時代遺跡が確認されたことから、この地点に関しては新たな遺跡名が必要ではないかと考える。

縄文時代中期後葉の土器について　一部に比較的古い段階のもの（9～13）も含むが、大半は北白川C式後半並行期の在地産として認識される。また、少量のいわゆる平式類似資料（97など）など、比較的新しい段階の土器も含むが、磨消縄文を有する後期初頭に比定される土器は認められなかった。近江では、北白川C式併行期の土器に中津式あるいは中津式への過渡期的様相を示す土器が共伴することが少なくないが、そういったものは認められなかった。

器種では、北白川C式の深鉢A類に比定されるものが多く認められ、縦位の橋状把手を施す深鉢B類や山形口縁を持つ深鉢C類、縄文施文の深鉢D類および浅鉢については、それほど多くない。また、近江における概期の縄文土器製作技術上の特徴として、①胎土に大粒の砂粒を多数混入する、②ナデなどによる内面の調整が雑なものが多い、などが挙げられるが、今回の資料も同様の特徴を示している。

今後も、未公表資料の公表に努め、近江における縄文時代の基礎資料の充実を図っていきたい。なお、本稿で掲載した資料について誤認があるとすれば、その責は筆者個人にあることを明記しておく。

謝　辞

本稿の執筆にあたっては、同僚の中村健二氏・藤崎高志氏・瀬口眞司氏・鈴木康二氏に、多くの貴重な助言をいただきました。感謝いたします。

（こじま　たかのぶ：企画調査課主任技師）

引用・参考文献

○北村圭弘・中村健二「屋中寺廃寺」『土地改良総合整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－１』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1997。

○小島孝修「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き　―地域の検討２．湖東南部地域―」『紀要』第11号　財団法人滋賀県文化財保護協会　1999。

○滋賀県教育委員会『平成７年度　滋賀県遺跡地図』1996。

○瀬口眞司「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き　―地域の検討1.湖東北部地域―」『紀要』第11号　財団法人滋賀県文化財保護協会　1999。

編集後記

紀要第17号をお届けいたします。今号は８本の原稿を掲載することができました。内容等も、縄文時代から近世にまで至る、様々な時代を対象にしています。

この紀要を職員の研究活動の成果として、今後もさらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的なご叱正・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(K.S.)

平成16年(2004年) 3 月

紀　要　第17号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL：(077) 548-9780
FAX：(077) 543-1525
URL：http://www.shiga-bunkazai.jp
E-mail：mail@shiga-bunkazai.jp
印刷・製本：宮川印刷株式会社